二次元ドリームノベルズ
BEAT VALKYRIE DXBEAL
超昂神騎
エクシール
～双翼、魔悦調教～
峰崎龍之介
挿絵／孫陽州
原作／アリスソフト
18
未満
試し読み版

第一話　迫る決戦の時　006
第二話　峻烈なる紅、黒に染まりて　077
第三話　清廉なる蒼、白濁に沈みて　133
第四話　希望と絶望　181
最終話　超昂神騎　238
後日談　ああっアズエル様っ　310

登場人物紹介

Characters

神騎（しんき）エクシール

天界より魔王誅滅のために遣わされた神騎（天使）。継彦の魔力を受けて半人化する。責任感が強く礼節を重んじる、優等生タイプ。

神騎（しんき）キリエル

人間の女の子で、継彦の後輩。致命傷を負ったところをエクシールに救われ一命を取り留める。エクシールの力を得たことで半神化してその後覚醒し、第二の神騎となる。

央堂継彦（おうどうつぐひこ）

悪魔の計略により力を奪われた魔王の転生体。人間の学生として生活する、エロゲーが大好きな青年。

第一話　迫る決戦の時

長大な階梯を上りきり、開けた場所へと出る。天空に浮かぶ堕天使の居城、フレナンジェロ城を構成するみっつの階層のうちのひとつ、『悪意』の階層だ。

「誰も……いませんね」

常人には立ち入ることすらできないその場所に、ひと気などあるわけがない。それはわかっていたが、神騎エクシールは視界で捉えた情報を咀嚼するように、小さく呟いた。蒼を基調とした聖鎧を身に纏い、同じく蒼の髪を腰まで伸ばした、絵にも描きようのない美女である。ぱっと見る限りでは温厚で柔らかな雰囲気に満ちているが、目だけは凛とした光を湛えている。その峻烈な眼差しは、彼女を戦士――神騎であると証明するようだった。例えるのなら、伝承に伝わる戦乙女のようだとでもいうべきか。

「そうだね。……でも、油断はできない。相手はあのシェムールだ」

呟きに応じたのは、紅の戦装束を纏った少女――神騎キリエルだ。どこか忍者を思わせるいで立ちの彼女は、小柄な体にめいっぱいの警戒心を詰め込んだまま、目元を厳しくして『悪意』の階層を睨みつけている。その視線が左右に動くたび、サイドテールにした紅

蓮の髪がさらさらと揺れた。
　エクシールはそんなキリエルの言葉に、小さく顎を引いてみせた。ふたりが討とうとしている敵は、奸智と魔術に熟達した堕天使、シェムールだ。どんな罠が待ち受けていても不思議ではない。
「彼女のことです。闇討ちくらいは平気でやってくるでしょうから、十分注意しないといけません――」
「あら、失礼ね」
　――と。
　唐突に。まったく唐突に声が聞こえて、ふたりの神騎は同時に身構えた。そしてその鋭い視線の先に、ずず……と紫色の影が現れる。影は徐々に人の形を取り始めると、やがて褐色の肌と漆黒の翼を持つ妖艶な美女へと変貌を遂げた。そしてその女こそが、堕天使軍団グリゴリのナンバー2、シェムールだった。
「神騎如きに闇討ちなんて、いまさらしないわ。そんな面倒なことをしなくても、捻り潰せばいいだけだもの」
　ふたりを――いや、世界の全てのものを見下すような笑みを浮かべて、シェムールは嘯いた。

「出たね、女狐。……今日こそ決着をつけるよ」
キリエルが吐き捨てるように告げた。
毒婦、蛇、女狐、裏切り者――シェムールから想起される言葉はいくらもあるが、そのどれもがろくでもないものだ。実際その印象は、なにひとつとして間違っていなかったりするが。
「ふふ……出来損ないの神騎の分際で、よく吼えるわね。……八つ裂きにしてあげたくなるわ」
シェムールは言うと、豊かな胸を持ち上げるようにして組んでいた腕を解いた。それを見て、エクシールは――
（――来る！）
そう内心で叫んだ時には、彼女は左に跳んでいた。視界の端には反対側へと跳躍するキリエルの姿も見えている。そして次の瞬間、ふたりが一瞬前までいた場所を、禍々しい魔力の弾丸が通り抜けていく。
「――うふふ、流石にこの程度は避けるのね。ではこれはどう？」
微笑んで、シェムールが何事か呟き始めた。するとその体がすぅと霞んでいき、やがてみっつに分かれた。

「さあ」
「三人分の攻撃」
「果たしてかわしきれるかしら？」
三人のシェムールは、まったく同じ顔、同じ声で告げてきた。感じ取れる魔力の強さもほぼ同等だ。正直、ぱっと見ただけでは見分けなどつかない。
そして敵が、じっくり観察する時間などくれるわけがなかった。
『死になさい、哀れな神の操り人形！』
三人に分裂したシェムールたちは、次々に手を掲げて様々な魔術を連続して発動した。
たちまち『悪意』の庭園は、爆音と高熱、雷撃と氷柱が荒れ狂う地獄絵図へと変貌した。
「っ――なんて無茶苦茶な……！」
エクシールは小声で呟きながら、大小のステップを踏んで攻撃魔術の嵐をやり過ごした。聖鎧の防御能力ならば一撃や二撃受けたところで死にはしないが、だからといって当たってやる義理もない。
（強大な魔力に、強力な魔術。シェムールが大きな力を持つ堕天使なのは間違いありません。ですが狙いが甘すぎます。やはり彼女は暗躍こそが本分。直接戦闘を行うのは、それほど得手ではない……）

三人に分裂して魔術を行使する端末を増やしたことそのものは、実に高度な技術だ。だが逆に言えば、彼女はその高い技術を活かしきれていない。高すぎる己の基本スペックに驕って、戦うための創意工夫に至っていないのだ。ならばつけ入る隙など、いくらでもある――

「……キリエル！」

飛び交う致死の攻撃魔術から身をかわしながら、エクシールは鋭く叫んだ。

「わかってるよ、エクシール。――ここは私の速さが必要だってね！」

紅の神騎は勝気な目を闘志で彩りながら、打てば響くような返事をし、一切の予備動作を挟まないままトップスピードで駆け出した。忍者じみた装いの印象を裏切らない、神速の飛び出しだ。

「――させると思う？」

当然ではあるが、シェムールは迎撃してきた。無差別に近かった魔術爆撃が、キリエルの進路を塞ぐように集中する。だがキリエルは、慌てず騒がず進路を変更した。すると魔術の爆撃は彼女を追って、その軌道を変える。

「この程度、当たらないよ！」

「くっ……ちょこまかと！」

キリエルが走り、三人がかりの魔術攻撃が進路を塞ぐ。そんなことが何度も繰り返されると、褐色の毒婦は苛立たしそうに表情を歪めた。

（かかりましたね）

それほど戦い慣れていないシェムールは、キリエルの持つ『速度』という武器を、無意識のうちに過剰に警戒していた。せっかく得た広範囲への攻撃性能を捨て、その狙いをキリエルの進路に左右され続けている。

それによって、エクシールはわずかな時間、完全にフリーになった。彼女はその時間の中で、そっと手を掲げて呟いた。

「――神剣ソル・クラウンよ――」

求めに応じ、神武――神騎だけが扱える究極の神造兵器が顕現する。清廉な輝きを持つ白銀の剣。邪を祓い魔を断つ、彼女だけの刃。

その柄を強く握り、エクシールは深呼吸した。

（相手は分身を作り出しています。つまりふたりまでは偽者。魔力さえあれば復元できる、倒しても意味のない人形。対応策は本物を見抜いて叩くか、あるいは――）

――一息に三人とも抹殺するかだ。そう付け加えた時には、蒼銀の神騎は爆裂するような音を足元から発して踏み出し、シェムールの下へと一直線に駆け出していた。

「っ、おのれ――！」

高速の突撃に気づいたシェムールたちのうちのひとりが、表情を歪めてこちらに手を向ける。そしてその次の瞬間、その掌から漆黒の魔力弾が、立て続けに放たれた。

咄嗟に編んだ魔術とはいえ、それなりの威力はあるだろう。少なくとも直撃して無傷でいられる代物ではない。

それはわかっていた。わかっていたが、エクシールはあえて、魔力弾の雨に向かって真っすぐに突っ込んでいった。

「⁉　なぜ――」

額、右肩、左前腕――あちこちに魔力弾が着弾するのを感じながら、それでも走る。するとシェムールは奥歯を噛み、驚愕と焦燥を孕んだ呻きを漏らした。痛みと傷を無視した特攻は、保身に長けた彼女にとって意外なものだったのだろう。

「なぜ止まらない――！」

エクシールは全てを無視し、『目の前のシェムール』を、白銀の刃で袈裟に斬り捨てた。

「あああああああぁぁぁ……っ！」

断末魔が聞こえた。だが同時に、斬り捨てたシェムールの体が紫の霧に化けて消えていくのも見えた。まずは偽者が片付いた、ということだろう。

「お、おのれ！　神騎如きが――！」
流石に余裕をなくし、残るふたりが一斉にこちらを向く。が、それは悪手だ。
「よそ見してると死ぬよ」
神速の攪乱術でシェムールの気を引き続けていたキリエルは、敵の注意が自分から逸れると、瞬く間にシェムールの懐に潜り込んだ。そしていつの間にか握っていた彼女の神武――神双刃ハヤテ・カムイを巧みに操り、並び立つ褐色の毒婦の腹を十字に裂いた。
「ぐ……っ！　あああああああああああっ！」
再びの断末魔。が、今度も本体ではなかった。斬られたシェムールは霧となって空気に溶けている。ならば最後のひとりこそが――
「――あなたが本体ですね。……『悪意』の番人シェムール。あなたを……神に代わりて誅滅します！」
叫び、腰だめに構えたソル・クラウンを突き出す。だがシェムールも黙って殺されはしない。咄嗟に魔術の障壁を生み出し、迫る致死の切っ先を防いでみせた。
白銀の刃と魔力の障壁が、ばちばちと火花を散らして拮抗する。その膠着は、そう簡単には崩れそうになかった。
もっともそれは、これが一対一の戦いであればの話だが。

えっちシーン試し読み

と、執拗なクンニに悶えるエリスに、さらなる快感が加わった。いつの間にかベッドに上がっていたキリカが妖しい笑みを浮かべながら、たわわに実った乳房を弄り始めたのだ。ほっそりした小ぶりな指が、くすぐるように表面を撫でる。それだけでも背筋に痺れるような感覚が走り抜けた。また淫らに勃起した乳首をくりくりと刺激されてしまうと、エリスはもうたまらなくなった。

「だめぇ……そんなに一度に、刺激したら……っ。あ、ああっ。や、くぅん……ううっ」

いよいよ体が出来上がってしまったエリスは、がくがくと腰を震わせ始めた。内腿では溢れ出した愛液が、卑猥な線を描いている。

絶頂が近い。とてつもない勢いで迫ってきている。彼女がそれを自覚した時には、もう遅かった。

「あっ……ああっ！　イク……だめ、イク……っ！」

びくんっ。大きく体全体を震わせつつ、エリスは一息に絶頂へと昇り詰めた。

「お、イった」

継彦の呑気な声。少々腹立たしくすらあった。だが体はまだイったままで、『魔王的ですっ！』と怒鳴ることもできない。

ぷりんと尻を突き上げた体勢のまま、エリスは絶頂の余韻が過ぎ去るのを待った。情け

ない格好なのはわかっていたが、上手く力が入らないのだ。
そしてその間に――
ぽすん、と。エリスの隣で、キリカが四つん這いになった。しかも彼女は自ら秘所を指で割り開き、囁くようにこんなことを言う。
「センパイ。……いいよ」
その声の、なんと悩ましいことか。幼さを残した少女から飛び出たものとは、到底思えない。
だが現実に、報生キリカという少女は確かな色気を湛えて、愛する男と繋がる瞬間を待ち望んでいる。
「……いいのか？　お前にはまだなにもしてないぞ」
前戯は必要ないのかと、継彦は訊いていた。だがキリカははにかんで、
「大丈夫。私はセンパイの肉奴隷だからね。いつでも準備はできてる。……ん、いまのはちょっと嘘かな。はは……自分でもびっくりだけどさ。エリスさんのえっちなとこ見てたら、勝手に準備できちゃったんだ」
「なんだそりゃ。もしかしてお前、ちょっとそっちの気が？」
「あはは、かもね。うん、そうかも。……だからさ、センパイ。私をエリスさんに盗られ

ないように、頑張らないとね」
気心知れたやり取りは、心地よく繋がるための潤滑油か。なんにしろふたりはごく自然な流れで後背位の挿入態勢を整えると、合図もなく深々と結合した。
「あ……くぅぅぅ……深、い……」
華奢な体躯がぴんと反り返り、可憐な唇から華やかな喘ぎが零れる。そのさまは例えようもなく淫靡で、そして――
（……綺麗……）
ぼんやりとした意識の中で、エリスは呟いた。かつての彼女であれば考えられないことだった。欲望に忠実な姿を見て、美しいと感じるのは……。
「あうっ、ん、んん、あ……んんっ」
抽挿が始まると、キリカの喘ぎは部屋中に響くほど大きくなった。珠の汗が浮かんだ肌は淫らな光沢を帯び、少女の持つ青い色気を最大限に引き出している。
「あっ……♥」
と、鼻にかかった甘い声が、さらに甘く蕩けた。
（気持ちいいところを……突かれているから？）
エリスは食い入るように、ふたりの交わりを見つめていた。というより、目が離せなく

なっていた。

「いい……気持ちいいっ。センパイのおちんちんが、お腹の中、掻き回して……っ。あうっ、んん、う……あああああっ」

小さな体がびくびくと震える。イったのだろう。結合部からは粗相と見間違えるほどの愛液が溢れ出している。

だが交わりは終わらなかった。いや、むしろ激しくなっている。

「ひゃあうっ。だめ……イ、イってるのに、そんなに突いたら……♥　イク、またイっちゃうっ♥」

全身を強張らせて、キリカはいやいやをするように首を振った。が、動作や言葉とは相反して、彼女の顔は嬉しそうに綻んでいた。

（あんなに乱れて、喘いで……凄くいやらしいのに、少しも浅ましくは感じない……むしろ、羨ましくすら……）

思わず本音が漏れた。獣のような格好で犯されていても、キリカはとても美しい。それはきっと、愛する男に征服されることを、彼女が心から愉しんでいるからだ。

裸になり、なにひとつ取り繕わずに触れ合うことで露出した、報生キリカという少女の想い。それがあまりにも純粋だから、どんなに乱れても、彼女はずっと綺麗なままでいら

れる……。

（……ああ。羨ましい……）

再び本音を呟く彼女の股間から、ぽたりぽたりと雫が落ち、シーツに卑猥なシミを作った。だがそれは、単に淫気に中てられたからではない。

エリスとて継彦を愛している。それは間違いない。けれどキリカほど純粋な想いを抱けているかと問われれば、きっと言葉に詰まるだろう。エリスと継彦には、本人たちにはどうしようもない部分にしがらみがある。どんなに割り切ってもつきまとう、断ち切れない因縁がある。

だから羨ましい。素直に継彦を想えるキリカのことが、たまらなく羨ましい。

あんな風に、純粋な気持ちで彼を想えたら。なにひとつ取り繕わずに、この体を捧げられたら――それはどれほど、快いだろう。

（私も……キリカさんのようになれたら……）

エリスは自らの秘所へと手を伸ばした。雄々しいペニスで後ろから貫かれ、甘い官能に打ち震えているキリカを羨んでいるうちに、体がどうしようもなく火照ってしまったのだ。

（いけない……こんなはしたないこと……）

そうは思ったが、手は止まらなかった。込み上げる淫情があまりにも切なくて、どうし

てもじっとしていられなかったのだ。
「あ……ん、ぅ……あっ」
と、ついに声まで漏れた。淫らな嬌声。それは隣で熱く愛し合っているふたりにも、はっきり聞こえていたようだった。
「エリスさん……？」
「エリス……？」
「ああ……見ないで。見ないでください。こんな……こんな姿……」
——言葉とは裏腹に。ふたりに見られるほどに、エリスの肉体は甘い疼きを増していった。それはやがて飽和して、エリスの口を開かせた。
「私も……欲しい、です。継彦のペニスが……」
浅ましい懇願。一度口にしてしまうと、あとは総崩れだった。
「犯して……犯してください。継彦のペニスで、私のお、おまんこ、を……！」
震える声で言い切って、エリスは自ら秘所を指で割り開いた。すると、
「はは、３Ｐにしたのは正解だったかな。……エリスが自分からそういうこと言うの、初めて聞いた」
背後で苦笑の気配が弾け、同時に熱くて硬いものが秘所に触れた。

亀頭。膣口をこじ開ける切っ先。濡れそぼった陰唇を撫で上げてくる。

「あ、ああ……♥」

とっくに蕩けていたエリスの体は、たったそれだけの刺激でぶるりと震えた。そして亀頭が膣口に埋まり、続いて竿が侵入してくると……。

「あ、あああああ……あ、んん……あうっ」

途端に背筋を駆け上った快感に、エリスは蒼髪を振り乱して悶えた。

気持ちいい。たまらなく気持ちいい。切なくて仕方なかった雌穴が、雄々しいペニスに満たされていく。その充足感は代用の利かない、セックスならではの快感だった。

「うお、いきなり締め付けが……！　そんなに待ち遠しかったのか？」

継彦は言いながら、むっちりとしたエリスの双臀を揉みしだき、ずんずんと腰を前後させた。

亀頭に奥を小突かれ、カリの返しにGスポットを嬲られる。するとエリスの膣内は、たちまち官能でいっぱいになった。

「や、あ……ん、あふ……ひっ……んん……♥」

感じる。なにをされても感じてしまう。ゆっくり引き抜かれるのも、思い切り突き込まれるのも等しく気持ちいい。

「ん……くぅ……っ。シェムール……お前の思い通りにはさせない……！」

薄暗い研究室の中。キリエルの孤独な戦いは、そうして始まった。

◇

――あれから、どれくらい経っただろうか。一時間以上経った気もするし、ほんの十分しか経っていない気もする。己の欲求を抑え込むだけの時間はひどく緩慢に感じられて、体内時計はまるで役に立ってくれない。

「はっ……はぁ……ん、う……」

キリエルは込み上げる甘い疼きを、ひたすらに耐え忍んでいた。もじもじとお漏らしを堪える子供のように腰を揺するさまは、羞恥で歪む表情と相まって非常に淫靡だった。

（……体の疼きが、全然治まらない……）

気を抜くと緩んでしまう口元を苦労して引き締め、陰鬱に呟く。キリエルの体を蝕む甘い疼きは、弱まるどころかどんどん強くなっていた。時間が経てば媚薬の効果も薄まるのではないかと、淡い期待を抱いていたのだが……どうやらその線は捨てた方が良さそうだった。

最初に味わわされた絶頂がいかに甘美なものであったかを、体はまだ覚えている。だからこそ『おあずけ』された状況は堪えがたい飢餓感を生み、キリエルの精神を少しずつ衰

弱させていた。

（……気が、狂いそう……あっ）

と、キリエルは目を見開いた。いつの間にか、左手が股間に向かい始めていたのだ。

（……くっ、少し気を抜いただけで……私、こんなに快楽に弱い人間だったの……？）

無意識にオナニーを始めようとしていた事実を強く恥じて、キリエルは頭（かぶり）を振った。

（駄目だ……このままじゃ、いつか限界がくる……）

股間の近くをふらふら彷徨（さまよ）っていた左手を引き、人差し指を噛んで気を紛らわせながら、赤髪の少女はひとりごちた。

（気に入らないけど……妥協するしかない。自分の体のことだからわかる。このまま無理に耐え続けたら、私はきっと……壊れてしまう）

キリエルは絶望的な状況に置かれていながらも、努めて冷静に思考を回した。その冷静さがどこから来ているものなのかは、なんとなくわかっている。このろくでもない状況で、心を腐らせずにいられる理由。それはきっと——

（センパイのおかげ、だろうね）

愛する男の顔を思い浮かべると、不思議と心が軽くなった。お調子者で、スケベで、だがどこか憎めない魔王様。生き延びて彼と会うためならば、どんな恥辱にも耐えられる気

がした。
それに……もっと現実的な希望もある。救出に特化した神具、『アッサルの弓』の存在だ。
どれだけ離れていようと矢が必ず対象の下に辿り着き、弓の下へ連れ帰る効果を持つあの神具は、恐らく既に放たれているはずだ。ぼんやりしているように見える継彦だが、そのあたりの判断を間違う男でもない。
もっとも敵の本拠地、それも最奥部分となると、矢の到着はまだまだ先の話になるだろうが……縋るべき希望と見做すには、十分な代物だった。
（矢が届いて、センパイのところに帰れても、私自身が壊れてしまったら元も子もない。シェムールの思惑にほんの少しとはいえ乗るのは、凄く腹立たしいけど……いまは、そんなことを気にしている場合じゃない）
呟いて、キリエルは己の体の状態に、改めて意識を向けた。
果たされずに溜まり続けた肉欲によって、彼女の肌はどこもかしこも紅潮していた。汗もひどい。土砂降りの雨にでも降られたようだ。性感帯には常に甘い疼きが滞留していて、決してキリエルを心穏やかにはさせない。乳首は戦装束の中でビンビンに勃起したままだし、膣口はなにかを咥え込みたい衝動でひくひくと蠢いている。膣内から滾々と湧き出る愛液の量など、失禁でもしているのかと疑うほどだ。

（ちゃんと向き合わなきゃ……無意味に意地を張るんじゃなくて、どうすればこの場を乗り切れるのか。それを考えれば……答えはひとつしかない）

熱い息を吐きながら、キリエルは黙考した。この異常な肉欲に真っ向から抗い続けるのは、例えるなら無呼吸で長距離走に挑むようなものだ。当然どこかで限界が訪れてしまい、ゴールには辿り着けない。ならば無闇と意地を張らず、途中でしっかり息継ぎをした方がいい。

この場合の息継ぎとは、つまりオナニーをするということだ。既に破裂寸前まで溜め込まれている淫情を小出しにして発散することで、この責め苦を耐え抜けるだけの精神力を維持する。それがぎりぎりまで意地を張り続け、それでも限界なのだと悟った、キリエルの判断だった。

ただ、気をつけなければいけないこともある。『息継ぎ』の範疇（はんちゅう）を超えて快楽を貪ることだけは、決してしてはいけない。それはキリエルの『堕落』に繋がる行為であり、シェムールの目論見が達成されることを意味する。

（あくまで戦略的な判断として、コントロールされた快感だけを得る……そうしないと、聖鎧が黒く染まってしまう。それだけは避けないとね……）

キリエルは黙考を閉じると、ひとつ大きく深呼吸をした。覚悟を決めて慎重に左手を操

り、自らの股間へと近づける。するとまだ触れてもいないのに、秘所がジンジンと熱を発し始める。どれだけ理屈を捏ねたところで、やろうとしていることは自慰行為だ。散々に焦らされた体が期待してしまうのは、無理もないことではあった。

（気が早いなぁ、もう。まったく、我がことながら情けないよ……）

とことんまで発情してしまった己の肉体に半ば呆れつつ。キリエルはいよいよ、指先を股間に触れさせた。そして――

「……え？」

――間の抜けた声を漏らして、キリエルは自らの股間を見下ろした。

ない。触れた感覚がまったくない。指先は間違いなく、戦装束越しに股間を撫でているのに……なにひとつとして、感じるものがない。

「そんな……なんで⁉」

思わず声を荒らげ、指先を強く股間に食い込ませる。だがそれでも、なにも感じない。快感どころか触れた感覚そのものが絶無だ。

胸や腹にも触れてみたが、結果は同じだった。まるで触覚が消失してしまったかのように、なにも感じ取ることができない。

「どうして……。っ、まさか……！」

と、そこでキリエルは、シェムールが口にしていた言葉を思い出した。
『他にもちょっとした仕掛けがあるけれど……それはまあ、いまは関係ないわね』
『極上に敏感な雌豚の体……存分に堪能なさい。……できれば、だけれどね』
「あの……女狐！　左手は自由に使っていいなんて言って、これじゃ使えても意味ないじゃないか！」
全てを理解して、キリエルは叫んだ。戦装束が体にフィットしている感覚はあった。なのに触れた感覚がないということは、触覚を消されたわけではない。ならば考え得る可能性はひとつ。
聖鎧に仕込まれた魔術に、外部からの刺激を完全にカットする効果が含まれていたのだ。これではいくら触ったところで快感など得られない。
「……っ、まずい……！」
憤慨していた表情から一転して、キリエルは眉を切なげに寄せた。『どう足掻いても触れない』とわかった反動なのだろう。『触りたい』という欲求が、急速に膨れ上がり始めていた。
その欲求に逆らうのは、正直難しかった。必要なことと割り切っていたとはいえ、一度は『ようやく触れる』と安堵していた彼女だ。それを取り上げられた落胆は、とてつもな

く大きいものになる。
「……っ、う、あ……ぁぁ……」
心が少しずつ、楽な方へと傾き始めていた。意固地になっていた時は抑え込めていた淫らな感情が、怒涛のように溢れ出してくる。
触りたい。尖った乳首を捻り上げ、充血したクリトリスを弄り回し、濡れそぼった雌穴をめいっぱいに穿りたい――強烈でありながらもどこかあやふやだった淫情は、そうして徐々に言葉を形成し、キリエルの胸中に満ちていった。
そして……彼女がそのことを、無意識ではなく意識的に自覚した瞬間。
その変化は、音もなく起きた。
ずず……と。キリエルの火照った体を覆う戦装束の一部……ちょうど乳首の真上部分が、徐々に黒く染まり始めた。神騎の心を映す鏡である聖鎧には、到底似合わない漆黒のシミだ。
「……う、うそ……そんな、だって私、まだ……」
それを見て、キリエルはぞっとした。聖鎧の黒化は、キリエルの心が『堕落』に向かいつつあるということを示している。これ以上侵食が進んだら、かつてのように……『嫉妬』の魔将ジュラウスに精神を乗っ取られた時のように、邪悪で淫らな姿へと変貌してしまう。

「……！　だ、め……。止まって……違う、違うんだ……私はまだ、まだ耐えられるはず、で……！」

祈るように囁く。だが、『黒』の侵食が止まることはなかった。それどころか、事態は一気に悪化していく。

『黒』に侵食されている乳房付近の布が音もなく消え去り、いやらしい形に口を開けたのだ。そうなれば当然、卑猥に勃起した敏感乳首は、無防備に外気に晒される。

「はあぁぁぁぁぁ……っ」

研究室の冷たい空気は、火照り切った敏感豆にとっては猛毒だった。身構えるよりも先に、甘い声を漏らしてしまう。

（そん、な……空気に触れただけで、こんなに気持ちいいなんて……。も、もし……指で触ったりなんかしたら……どうなっちゃうの……？）

肩をプルプルと震わせながら、彼女はそんなことを考えた。

それは純粋に快楽を求める思考であり、『堕落』に繋がる淫らな願望だった。決して思い浮かべてはいけない、甘い果実の在処（ありか）だった。

「い、一回だけ、なら……」

震える声で呟いて、左手を露出した乳首に近づける。そしてほんの小さな力で、ただ一

度だけ撫で上げた――その瞬間。
「あひっ……ひぃぃぃぃぃっ!?」
キリエルは弓のように反り返り、ほとんど悲鳴のような嬌声を張り上げた。
（うそ……うそだ……。イってる……私、乳首だけで……たった一回、撫でただけで……！）
これまで経験したことのない魔悦が、そっと撫で上げただけの左乳首を蹂躙していた。電気が走るような、という表現ではまるで足りない。左の乳房が丸ごと消し飛んだかのような、いっそ凄絶なほどの快感だった。
（だめ……これ、だめ……気持ちいい……気持ち、よすぎる……！）
口の端から涎を零しながら、紅の神騎は身悶えした。その顔には、本人の意志とは無関係の恍惚（こうこつ）が、ありありと浮かんでいる。
が、その恍惚の表情は長くは続かなかった。乳首での絶頂は鮮烈だが、持続時間がひどく短いのだ。
「ああ……熱い……乳首、熱いぃぃ……」
思わず喚（わめ）く。媚薬が回り切っているだけでなく、長時間生殺しにされていた肉体が、たった一度の絶頂で満足できるわけがなかった。
「もう一回……もう一回、くらいなら……」

声にはもう、先ほどまでの気丈さや冷静さは残っていなかった。あるのはただ、快楽を求める浅ましさだけ……。

「んぅ……くひぃっ……！　すご、い……乳首、乳首ぃ……あぅ、はあっ。気持ちいい、気持ちいい……！」

硬くしこった淫らな果実を摘まみ、くりくりといじめながら、キリエルは蕩け切った喘ぎを迸らせた。

またイキそうだった。あまりにも早い絶頂。異様なことだとわかっているが……手はもう、止まってはくれない。

「あ、あああ……ひぅ、うぅぅぅぅっ！　だめ……私、またイクぅっ！」

がくがくと身を震わせ、キリエルは再び果てた。鋭く浅い乳首での絶頂。まるで即席で作られる楽園のようだった。

（ああ、だめ……これ以上は、ああ、これ以上、は……）

思ったが、乳首を弄る手は止まらなかった。それどころか、彼女はこんなことを口走ってしまう。

「もっと……もっとイキたい……足りないの……乳首だけじゃ、足りない……！」

（なにを……言っているの？）

自らが口にした言葉が信じられず、キリエルはぞっとした。手だけではなく口すらも意志を無視し始めていることに、恐怖すら覚える。
「イキたい……」
口がまた、勝手なことを声に出して呟く。それを内側から為すすべなく見つめて、キリエルは力なく、内心でだけ否定の言葉を紡いだ。
（やめて……そんなこと、言わないで……）
「あそこに……あそこに触りたい……」
（やめ、て……やめて！）
縋るように念じる――だが彼女の口は、既に決定的な単語を呟いていた。
「おまんこ……触りたい、よぉ……」
その瞬間。
くぱぁ……と。キリエルの股間を覆う戦装束の布が、いやらしく開いた。恥毛のないつるつるの股間が、無防備に曝け出される。
ぽたり、ぽたり……。阻むものが一切なくなった股間から、愛液が涙のように滴り落ちる。
「あ……あ、ああ……」

母音だけで呻いて――キリエルは恐る恐る、左手を股間に差し向けた。乳首だけでもイってしまうほど気持ちよかったのだ。これで秘所に触れたら。膣内に指をねじ込んで掻き回し、クリトリスを擦り上げたら、いったいどれほどの快感が得られるのだろう。淫らな期待は留まることなく膨れ上がっていく。

「し、仕方ない……よね。心を守るために、オナニーしてすっきりしておくって、さっき決めたし……だからこれは、私のせいじゃない。私は悪く、ない……」

もちろん、そんなわけはなかった。先ほどといまとでは事情が違う。いまのキリエルに、戦略的判断としての自慰を行える冷静さは残っていない。ゆえに彼女の言葉は、いまとなっては――

（言い訳だ……私は、言い訳をしている……）

快感に流される言い訳を。

キリエルは目を瞑った――自らの浅ましい行為を、直視してしまわないように。

「私、私は……悪くない……仕方ない……だって、こんなにも……からだ、熱いんだから……！」

言い訳を重ねて――彼女はひくひくと物欲しそうに蠢いている膣口に、自らの指を突き入れた。

「あ、ん……」
声はどうしようもなく甘かった。敵陣の只中でオナニーに興じるという、はしたない行為への罪悪感はまるでない。我慢の限界を通り越した渇いた体は、ついに完全に、悦楽の前に膝を屈した。
「あひっ……ひぃぃぃぃっ。すごい、すごいぃぃ……！　気持ちいい、おまんこ気持ちいいっ！」
誰に強制されたわけでもなく、淫らな言葉を口走りながら――キリエルは一心不乱に、オナニーに没頭した。
中指をめいっぱいに突き入れて、Gスポットを存分に嬲った。親指はクリトリスを捉えて、ぐりぐりとひたすらにいじめる。
「あ、イ……イクっ。こんなのすぐ、すぐぅぅぅ！」
長く赤い髪を振り乱し、キリエルはあっさりとアクメを極めた。下品なガニ股になり、かくかくと腰を振ってもいる。
淫らで浅ましいダンスは続いた。ようやく得た女性器での快感はこの上ない甘露だったが、まだまだ満足には程遠い。
「イク、イクイクイク……まだ、いくぅ……」

「ふふ……感じるでしょう？　背中なんてと思うかもしれないけれど、ここも立派な性感帯なのよ……」

言いながら、アゼルはたっぷりと時間をかけ、白く美しい背中を舐め回した。

「はあっ……あ、ああ……気持ちいい……」

エクシールはその特異な愛撫を、悩ましく吐息しながら受け入れた。

「……あら。ここも汗を掻いているわね」

と、不意にアゼルが呟いた。そして彼女は次の瞬間、思いもよらぬ行動に出る。

「んひぃっ⁉　あ、ああ……そこ、はぁ……」

口の端からだらだらと涎を零してしまいながら、へろへろの声で呻いた。アゼルは舌を背中から離し、エクシールの腋を舐めてきたのだ。

くすぐったさ混じりの快感と、汗を舐められる激しい羞恥。それらは溶け合いながら全身を駆け巡り、やがて彼女の思考を真っ白に染めた。

（こ、こんな快感が、あったなんて……）

口を半開きにし、ぐったりとアゼルに寄りかかってしまいながら、呆然（ぼうぜん）と呟く。あらゆる場所を責め立てられ、その全てで快感を得てしまった媚肉は、既に抵抗する力を失っていた。もはや自分だけの力では、真っすぐに座っていることすらできない。

ぴゅっぴゅ。ちょろろ……。両の腋を舐めしゃぶられる頃には、エクシールは脱力のあまり、少しだけ失禁してしまっていた。それはとてつもなく恥ずかしいことだったが、こことここに至ってはどうすることもできはしない。

「だいぶ素直になってきたわね……」

と、アゼルが満足げに呟いた。だがすぐに嗜虐的な調子を取り戻し、こう続けてくる。

「でも、まだ足りないわ。もっと素直に快楽を受け入れるようにならないと。エイダムのことなど頭の片隅にも留めておけないほど、イカせてあげる」

囁いて――アゼルはその指を、エクシールの股間に添えた。最初に細工をされ、通常の何倍にも肥大化させられたクリトリスが、根元からきゅうと摘まれる。

「あ……ああ……待って。お願いです、いまそこを弄られたら……！」

はっとして言うが、もう遅かった。アゼルはしなやかな指を巨大クリトリスに絡みつかせながら、ずんずんと突き上げを開始していた。

「あぐっ……うひいいいいんっ！　いぎ、ひいいいいいいいっ！」

背中や腋を責められていた時から一転しての痛烈な快楽責めに、エクシールはかっと目を見開いて、全身を痙攣させた。

（う、嘘……私、もう……!?）

イキそうだった。数秒奥を突かれ、クリトリスを扱かれただけなのに、もうイってしまいそうだった。通常であれば考えられないほどの感度。しかし執拗な色責めを受け続けていたエクシールの肉体は、驚くほどあっさりと快感の極致に至ってしまった。

「あ、あ、あああああああああああっ！　だめぇぇぇぇ！　イク、イクぅぅぅっ！」

喘ぎはもう止まらなかった。Gスポットを丹念に突き上げられ、肥大化したクリトリスを扱かれると、視界が真っ白に染まってなにも考えられなくなる。

イった。イキまくった。折り重なるようにして絶えず襲ってくる快感にひたすら翻弄され、数えきれないほどの絶頂を極めた。

「嫌っ、だめ、もう無理！　お願い、休ませて！」

最後には、半ば狂乱しながら懇願した。するとそのタイミングで、アゼルもまた射精の時を迎えたようだった。

「あひっ、くうぅぅぅぅ、はうっ。ああ、また膣内射精（なかだし）を……！」

どくどくと熱いものを注がれる感覚を味わいながら、エクシールは前のめりに倒れた。積み重なった絶頂に体力の大半を持っていかれてしまい、ただ座っていることすらできなくなったのだ。

結果エクシールは、玉座に座るアゼルに向けてぷりんと尻を突き上げる、ひどく情けな

い格好で倒れ伏すこととなった。
「いい格好ね、エクシール。ずっと見ていたくなるわ……」
アゼルがふとそんなことを言った。勝手な物言いだが、声はどこか、満足げにも思える。
（お、終わった……？）
ぴくんぴくんと美尻を揺らしながら、エクシールは力なく呟いた。あれほど射精させたのだ。アゼルがいったん満足し、調教を中断する可能性はある。
――それが楽観的すぎる考えだということは、直後に知れた。
つぅ、と。エクシールの丸く美しい、そしていやらしい桃尻に、指で撫でられる感覚が走った。
「……なんていやらしいお尻なのかしら。せっかく鎮めたのに、また興奮してしまったわ……」
「……っ」
その物言いに、エクシールは背筋を凍らせた。まだ調教が終わっていないことが確定したからだ。しかも――
「あ、嫌ぁっ。やめてください、お尻は……お尻は嫌ぁ……っ」
強引に双丘を割り開かれ、恥ずかしい排泄の穴を露出させられた蒼の天使は、羞恥のあ

まり目を瞑って呻いた。だが無論、そんなことで止まるアゼルではない。
「お尻は嫌、ね。それは恥ずかしいから？　それとも……気持ちよすぎるから？」
つぷ……。アゼルの指が、秘すべき穴にゆっくりと侵入してくる。すると汚辱感とともに一定の快楽が生じ、エクシールの脳髄を掻きむしった。
「感じているのね。ああ、哀れな子。ここもエイダムに穢されたのね。なら……清めてあげないと」
独り言のように呟いて、堕天使の王は自らの怒張を蒼き神騎のアナルへとあてがった。
「――っ。ま、待って！　お願いします、それだけは許して！」
切なる懇願は、無情にも無視された。エクシールはせめてもの抵抗としてアナルを固く閉じたが、その程度のことでは、一秒たりとも時間を稼ぐことはできなかった。
ぬぷぷ……ずぶっ。雄々しい男根は無慈悲かつ無遠慮に、エクシールの最後の砦を打ち破った。
「あぐぅっ、あふ、くあああああぁぁぁんっ」
焼けるような熱さが括約筋を蹂躙した。続いて内臓を押し上げるような重い衝撃が、腹部全体に走る。
「ん……凄いわ。本来はそういう穴ではないのに、ねっとりと絡みついてくる……」

桃尻を鷲掴みにし、ゆっくりと揉みしだきながら、アゼルはうっとりと告げた。
「アナルでこんなにもペニスを悦ばせられるなんて、やっぱりあなたは相当な淫乱だわ。それに、あなた自身も満更ではなさそうだしね？」
「……ち、違います。勝手なことを言わないで！　……っ、くああっ」
エクシールは残り少ない自制心を総動員し、必死に否定した。だがアゼルは嘲弄めいた笑みを零すばかりで、まともに取り合おうとはしない。
「嘘はいけないわ。……ほら、こうしてゆっくり引き抜かれると……」
ぬろぉ……と。極太ペニスがアナルから抜け出ていく。すると排泄に似た、だが決定的に違う感覚が、彼女の恥ずかしい穴をちりちりと焦がした。
「くあ……あ、はぁぁぁぁ、あっ！」
ペニスが抜ける感覚が終わると、休む間もなく押し込まれる圧迫感に見舞われた。アゼルが膣で行うのと同じように、本格的な抽挿を開始したのだ。
「あっ、かはっ。んふ、おおおおっ。おほっ、くうぅぅぅぅっ！」
獣じみた嬌声。止めたくても止められない。体は既に快楽に支配されている。前戯もなく挿入されたアナルでイキそうになるほど、出来上がってしまっている。
「ああ、イクわ……エクシール……ああ、エクシール！　受け止めて……私の欲望の全て

を！」
エクシールが灼けるような肛門絶頂を極めたのと同時に、アゼルが愉悦ここに極まれり、というような声を上げた。
びゅうううううっ！　びゅるる、びゅうっ！
膣内では何度も受け止めた灼熱の奔流が、今度は腸内へと注がれる。唯一汚されていなかった最後の砦が、無遠慮な白濁に染められていく。
「くひぃぃぃぃ、あぐ、くぅあああああああああああああああああっ！」
気高き神騎は最大級の汚辱をその身に浴びながら、絶え間ない肛門絶頂の波に打ちのめされ、あられもない声で絶叫した。
「……っ。……ああ……良かったわ、エクシール」
アゼルが恍惚の声を漏らし、まだぎゅうぎゅうに締め付けているアナルから、ペニスを引き抜いた。すると栓が抜けた形になり、注がれたばかりの白濁が、どろりと垂れ出てくる。
その姿は例えようもなく卑猥であり、そして無様だった。まさしく敗北者の末路といえよう。
――ただ。その瞳だけは、まだ鈍い輝きを残していたが。

（……負け、ない）

アナルと膣内から精液を垂れ流し、絶頂の余韻で全身を震わせながらも、エクシールは気丈にそう呟いていた。

体は既に堕ちていた。あらゆる場所を穢され、快楽の温床に変えられていた。

だが心は。心だけは、まだ折れてはいなかった。

（負けない……どんなことをされても、心だけは渡さない。継彦はきっと、助けに来てくれます。それまでは絶対に、耐え抜いてみせる……！）

ほとんど気絶しかけながら。エクシールは己を奮い立たせる言葉を、いつまでも繰り返していた。

後日談　ああっアズエル様っ

吸い込まれそうなほど美しい空、という言葉があるが――空はいったい、なにを吸い込むのだろう？

ふと湧いて出た自問を胸中で転がしながら、アズエルは空を見上げた。ひたすらに続いている青い空。ぼうっと見続けていると、確かになにかが吸い込まれるような錯覚があった。

ではその『なにか』とは？　再び過ったその問いに、彼女はこんな答えを出した。

「感情……かしらね。嫌な気持ちを、空は吸い上げてくれる――」

だから、というわけではなかったが。自宅であるマンションの屋上に、彼女はいた。本来は安全面を考慮して立ち入り禁止になっているのだが、そもそも彼女は空を飛べる。鍵のかかった扉程度で制止することなどできはしない。

「……嫌な気持ち、ね」

彼女は呟きながら、視線を空から引き剥がした。町を見る。様々な人間が笑い、泣き、怒っている――つまりは生活している場所を。

（自分がなにを嫌がっているのか――それがわからないほど愚かではないつもりだけれど）

声には出さずに呟いて、彼女は嘆息した。ここのところ同じことばかり考えている。だが、答えは未だ片鱗すら見えない。

（あの戦いが終わってから、ずっとこの調子ね。もう三か月になるかしら）

目の前に広がる町を中心とし、世界中に影響を及ぼした大きな戦い――聖魔大戦。その終焉から数えて、おおよそ三か月が経過していた。ちなみに彼女が地上に再び降り立ってから――天使長の立場を神騎ミカフィールに譲り渡し、このマンションに住むようになってからでいえば、一か月ほどが経っている。

（……空を見るようになったのは、こちらに降りてきてからね。つまり丸々一か月、こうしてなにもせずに空ばかり見ているわけだけれど）

無論、本当になにもしてないわけではないが。天使長の座こそ譲った彼女だが、役目を帯びていないわけではない。

魔王・央堂継彦――そのお目付け役（＋同じマンションに住むお姉さん）。それが、アズエルの最新のステータスだった。

――あの戦いで、央堂継彦はエイダムの魔力を全て取り戻した。だが彼は従来の形――

『魔族たちの王』としての魔王になることを善しとしなかった。
人の意志力より抽出される、それゆえに不安定な力……魔力。その管理者として、即ち『魔』を統べる『王』として、魔王を名乗ると決めたのだ。
具体的には、魔力を悪事に使う者……はぐれ魔族や堕天使を成敗する、というのが一番の仕事だ。つまり聖魔大戦時と、やることそのものはそれほど変わらない。
変わらないと言えば、エクシールやキリエルもそうだ。彼女らは『魔王』たる継彦を補佐し、魔力が健全に運用されるよう努める役目を負っているが……実際にやっていることはこれまで通り『正義のヒロイン』である。
（……頑張っているわよね、あの娘たち。あんなことがあったあとなのに……）
ふと気持ちが暗くなる。アズエルが思い悩んでいる原因の一端は、実のところ彼女らにあった。
アズエルは『アゼル』として、今回の聖魔大戦の中核にいた。そして最終決戦の最中、エクシールとキリエルを拿捕（だほ）し、激しく辱めた。
そのことが、アズエルの心の奥底に深く突き刺さっていた。堕天していた時のこととはいえ、あの行いは本当にひどいものだった。ふたりはなぜか許してくれているが、それがかえってアズエルの心をちくちくと刺していた。

（……誰も、私を責めない。天使長の座を明け渡した時もそう。本来なら剥奪されてしかるべきところを、私の方から言い出すまで誰も口にしなかった）

つまるところ――犯した罪に対して、罰が不足している。そのアンバランスさが、アズエルの心を曇らせているものの正体だった。

「……そうしていると、人間の女に見えないこともないな」

と――不意に話しかけられて、アズエルは振り返った。そこには青白い……というか完全に青い顔色の男がひとり、ぴんと背筋を伸ばして立っている。

「……ベゼル？」

聞き馴染みはあるが口には馴染んでいない名前を呟いて、アズエルは眉を顰めた。

ベゼル。神騎であるアズエルとは不倶戴天の間柄にある、純粋なる悪魔だった。聖魔大戦のあとも継彦に仕え、彼を通して『人間』というものを知ろうとしているらしい。なのでいまもエリスの部屋に逗留（とうりゅう）し、家事全般を請け負っている。つまりアズエルとは、同じマンションに住むご近所さんでもあるわけだった。

とはいえ、必要がなければ口を利かない相手であるのは間違いなかった。少なくとも考え事の最中に気やすく声をかけられる間柄ではない。

「人間の女に見える……ね、だとすれば、この服のおかげでしょう」

それでも性格上、無視するということができない彼女は、自らの格好を見下ろして呟いた。
彼女はいま、ベージュのタートルネックに黒のロングスカートといういで立ちだった。アクセサリーの類は一切身に着けていない、落ち着いた大人の装いである。
これらは地上に戻って来た時、エリスやキリカに連れられて購入したものだった。他にも数着購入したが、アズエルはこの組み合わせが一番気に入っていた。
「そうか。……ところで、なにを見ていたのだ？」
ベゼルは頷いてから、まったく関係のない質問をしてきた。随分と下手くそな世間話もあったものだ。
相手をするかどうか、少し迷った。だが結局、無視はできなかった。
「……別に。ただ町と……人を見ていただけ。あなたや私に苦しめられた、ね」
それは自虐であると同時に、目の前の男への皮肉でもあった。ベゼルにはかつて魔王の座を簒奪し、この町の人々を蹂躙した過去がある。
（もっとも……相手は悪魔。気にするような神経はないでしょうけれど）
実際、ベゼルが皮肉を気に留めた様子はなかった。そうか、と呟いて頷くのみだ。
「……それで、私になんの用が？　まさか下手くそな世間話をしに来たわけではないでし

よう」
「……下手だったか？」
少し気にしたのか、彼は片眉を跳ね上げた。それから嘆息し、言葉を続ける。
「継彦様が、お前に覇気がないのを気にしておられた」
「……そう」
返事が遅れたのは、継彦に悟られるほど態度に出ていたことを恥じたからだった。彼に知られているのなら、エリスやキリカにも伝わっている可能性がある。それはあまりよろしくない。
「……以後気をつけるわ。少なくともエクシー……エリスやキリカちゃんの前では態度には出さないようにする。それでいいかしら？」
「それを決めるのは私ではない」
「それもそうね」
拘らずに頷いて、アズエルはまた空を見上げた。これ以上は口を利かない。そう雰囲気で告げる。ベゼルはその空気に逆らわなかった。数秒もすると気配が消える。部屋に戻ったのだろう。
「……もう少し、ここにいる必要がありそうね」

この空が胸中に渦巻く不安を吸い込み切るまで、あとどれくらいだろうか。そんな益体もないことを考えながら、彼女はしばしその場に立ち尽くしていた。

◇

「どうだった？」

「駄目ですね」

打てば響くようなその返答を聞いて、継彦は手にしていた雑誌をテーブルに置いた。

「即答か。……どのくらい駄目なんだ？」

「重症かと。以前の彼女であれば、私の姿を見た時点で毒虫を見る目になっていたものですが。いまは……そう。『別に』といった態度でした」

「……なるほど、そりゃよくないな。いちいち喧嘩されるのも面倒だが、まったく意気がないのはより厄介だ」

言って、彼は頬を掻いた。

アズエルの様子がおかしいことに気づいたのは、ほんの数日前だった。以前は顔を合わせるたびに小言を言われていたのだが、再会してからはその機会が減っていたのだ。最初はそれほど気にならなかったのだが、こうも続くとなにかあるのではないかと思えてくる。

「……小言を言われたいわけじゃないが。言い返してくれないとＢＢＡ呼ばわりもできな

い。こっちが一方的に悪者になっちまうからな」
「僭越ですが継彦様。そうでなくともＢＢＡ呼ばわりはすべきでないかと」
「いや、お前が小言言うのかよ。……まあいい。ベゼル。俺の参謀として、なにか具申することはないか？」
足を組んで問うと、ベゼルはこくりと頷いた。
「具申というより報告ですが……彼女はこう申しておりました。『少なくともエリス様やキリカ様の前では態度に出さないようにする』と。こちらからおふたりの話題を出したわけでもないのに、名指しでした」
「……ふむ」
ソファに身を預け、じっと黙考する。それはつまり、エリスやキリカには弱みを見せたくないということだ。とするとアズエルの悩みの種はあのふたりに関係している可能性が高い。そしてあのふたりに関して、アズエルが気に病みそうなことと言えば……。
「……なるほど、罪悪感か。生真面目なアズエルらしい悩みだよ」
呟いて、彼は嘆息した。それから顔を上げ、ベゼルにこう命じる。
「……明日か明後日か。キリカもいるタイミングで、アズエルを呼んでくれ。今後の取り組みについて話があるとか、それらしい理由をつけてな」

「構いませんが……どうされるおつもりで？」
ベゼルの問いに、継彦はにやりと笑ってみせた。
「簡単さ。飴を欲しがるなら飴を。鞭を欲しがるなら鞭をくれてやればいい」
「……荒療治、というわけですか」
ピンときた様子のベゼルに、継彦は笑みを深めた。
「だいぶ察しがよくなったな」
「あなたという人間に慣れただけですよ」
淡々と答えるベゼルの表情には、少しだけ疲れたような色が滲んでいた。

◇

そして後日――
「――というわけで、アズエルには『お仕置き』が必要だと思う」
「はい？」
開口一番に放たれたその言葉に対し、真っ先に反応したのはエリスだった。なにを馬鹿なことを言っているんですかと、その顔にはっきりと書かれている。
「ううん……いまのはちょっと、私にも理解できないかな……」
普段は継彦とツーカーのやり取りをしているキリカも、突然のことに困惑していた。

が、継彦はまるで頓着しなかった。その反応は織り込み済みだとばかりに、鷹揚に頷いてみせる。

「要するにバランスの問題だよ。やられっ放しでいいのかって話さ。アズエル……あの時はアゼルだったが。とにかくこのデカパイ神騎は、ふたりに対して手酷い陵辱を行った。これまではなあなあで済ませてきたが、この先も一緒にやっていくなら、このままってわけにもいかないだろ」

継彦の言葉はエリスやキリカに向けられているように見えて、実際にはそうではなかった。その視線はふたりではなく、ソファに座っているアズエルのみに注がれている。

「……つまり、ケジメをつけろと。あなたはそう言いたいのね？」

ややあって、アズエルが静かに告げた。表情は硬い。眼光は鋭く輝き、一直線に継彦を睨み据えていた。

（殺すわよ、ってな視線だな。だが弱い。以前ならわりと本気の殺気が飛んできたが、これはほんの牽制だ。俺の真意を探ってるな。なら……）

絶対零度の視線を正面から受け止めつつ、継彦は言葉を継いだ。

「ああ。俺たちの今後のために必要な措置だ。罪には過不足ない罰が必要。違うか？」

「……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー！

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月発売！

敗北乙女エクスタシー

あなたのキモチイイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌

電子書籍版も好評発売中

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

二次元ドリームノベルズ

異世界シャイニングテラーシャ

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

女刑事美優
暴漢は白昼の路上で

リアルドリーム文庫

「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターンノベルズ」
から書籍化！

姫騎士がクラスメート！

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

異世界でチキる妹

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないエッチ系レーベル

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

ドキドキラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキ★ラブ！

ザ・ハイスクール・ヒーロー

二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索